

スポーツ選手の現役生活は非常に短い。40歳を超えて、なお活躍できる競技や選手は数えるほどしかない。単年度で見ればスポーツ選手の報酬はサラリーマンと比べ高額であることは否めないが、生涯賃金ということを考えれば一部のトップアスリートを除き高いと言えないかもしれない。セカンドキャリアという言葉に注目が集まっている。引退後にどんな仕事ができるのか。そのためにビジネススマナーやパソコン研修、インターンシップ等、アスリートが社会で通用す

SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



するための技能や知識を積極的に提供している。しかし、あえて苦言を呈するとすれば、今のセカンドキャリアはアスリートを社会に当てはめているだけではないだろうか。そこにアスリート

けていくには大切な要素かもしれない。アスリートはもっと自らの技術や経験を生かし、スポーツの発展にかかわるセカンドキャリアにチャレンジするべきではないだろうか。

半の方は「そんな勇氣はありません。そんな才能はありません」と言う。そこで私は「あなたが20歳前後でプロ選手としてやっていくと思うたその決意、厳しいプロスポーツ界で生きて

たいと考えているだろう。しかし、現実はその簡単ではない。指導者、解説者、もしくは芸能活動などは非常に狭き門である。

私たちはもっとアスリートの技術や経験を生かせるセカンドキャリアを選択できる環境の整備をしていくべきである。それがスポーツ界の発展に不可欠

「元選手」生かす環境を

の意思はあるのだろうか。

海外留学経験のある若者が留学先の外国語を生かせる仕事に就くことはよくある。自分の特徴を最大限に生かし、それを一生の仕事とする。この方が仕事を続

現役Jリーガーがセカンドキャリアの相談に来る。私は必ず「自らの技術や経験を生かしてサッカー教室などをビジネスとしてやってみたらどうですか」とアドバイスする。しかし、大

きたその努力、その方がよほど勇氣ある決断だし、十分ビジネスを成功させるための才能ですよ」と返す。多くのアスリートはセカンドキャリアに自らが行ってきたスポーツにかかわり

だ。「外国語が得意です」も「元スポーツ選手です」も同等に社会で通用するその人のキャリアなのである。(REGISTA責任事業組合代表)

隔週土曜日掲載